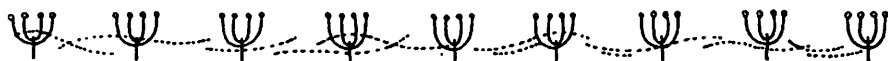


# 幼い子たちと「いい人間関係」



政府は、「構造改革」・「規制緩和」政策のもとで、保育の分野では、保育所の民間営利企業の参入、公立保育所の民営委託の推進、短時間勤務の保育士の導入などの施策を次々と実施しています。

子育て支援は、小泉内閣の重点施策のひとつになっており、「新エンゼルプラン」の目標値の前倒しなど親のニーズに応えているかのように見えますが、しかし子育て中の親の多くはその実感がほとんどないというのが実態です。子どもを安心して産み育てられる社会づくりについての県の調査でも子育て中の二〇、四〇代の親の二割が「子育て環境が満たされていない」と答えています（朝日新聞8月25日付）。一方、乳幼児への虐待や死亡事故のニュースがこの少子化のなかでも後を絶ちません。

去る九月二五日、県立女子短期大学で第四回新潟県保育研究集会在が「子どもといい人間関係を作ろうよ」をキャッチフレーズにして開かれました。若い保育者の参加が圧倒的に多く、学習意欲が非常に盛んであることを強く感じました。

当研究所では、幼い子たちと「いい人間関係」について、研究集会の主催者と協議し、この集会の成果と課題を整理して特集に反映しようと思いましたが。本誌ではこれまでに、特集「小学一年生」58号（99年6月）を契機に、乳幼児の保育環境はどうなっているか、「子育て共同」とはどういうことか、発達段階にそった保育実践などを59号「就学前の子育て」（99年8月）で特集しました。今回はもっと視野を広げて幼い子たちと「いい人間関係」とはなにかを考えていきたいと思えます。

（編集部）